

震災からの自宅再建

岩手県大槌町
臺 隆明

被災者、それは突然突き付けられた現実で、誰もが想像すらしていなかったことでした。しかしその日は何の予告も無しにやってきました。

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災・津波。

その瞬間まで、平穏な暮らしがあり、それぞれの人生の導くまま生活していました。

私が住んでいる岩手県大槌町では、町の中心地が壊滅するほどの甚大な被害と多くの尊い命が奪われました。

この日から深い悲しみと例えようのない喪失感、大きな不安の中、その日を生き抜く被災者としての避難生活が始まりました。

私の家族は幸いに全員が避難して無事でしたが、住んでいた家は基礎だけを残して全壊し生活の全て、そこに住んでいた形跡すら流されてしまいました。

そして避難所、そこは一時的なものではあるはずでしたが、住まいを失った被災者は、避難所から行く先がなく、多くの被災者はそこに留まるしか方法がありませんでした。

そんな中、私は臺家の短期・中期・長期の行動計画、指針を作成し、その計画に基づいて行動することを決めました。

まず短期計画では、町内の避難所からの脱出と当面の生活をどうするかということでした。私は一時的に内陸に避難することを決め家族全員で大槌の避難所を出ました。それと同時に中期計画として大槌での再建を考えたとき、仮設住宅という選択もありましたが、行政も混乱している中で、避難所から仮設住宅に移れる時期、仮設住宅の場所や広さも何の情報もなく、ただ待つだけという状況でしたので、自分でできることは全て自分で行うと決め、あらゆる選択と可能性を探りました。その中でたどり着いたのがトレーラーハウスでした。

トレーラーハウスは本来欧米でバカンス用に設計されているものですが、生活に必要な全ての家具、設備が搭載されています。自宅を失った私たちにとっては、すぐに生活が可能な設備がそろっていることが絶対条件でしたが、トレーラーハウスはその条件を満たしていたこともあり、即決で決断しました。

日本国内では普及していないトレーラーハウスでしたが、様々な情報や条件を収集してアメリカロスアンゼルスにあることを知り、そこから輸入することを決めました。

震災発生から約20日、3月末には業者に発注しました。

トレーラーハウスは国内の関係団体、協会等のお世話により米国のメーカーも

緊急性を理解し支援体制をとっていただき6月6日に大槌に到着しました。

内陸での避難生活から大槌での新しい生活の場として、この日からトレーラーハウスでの生活がはじまりました。

先に申し上げた通り、臺家の行動計画の短期・中期の計画は、無事に実現しひとまずの安心を得ることができました。

その後、大槌中学校吹奏楽部の子供たちと一緒に活動していた私は、東京から楽器の支援をしてくださいました建築家でNPO法人motherboard日本道代表の丸谷博男さんと知り合うことになります。

トレーラーハウスでの生活は、被災した町の復興を毎日見届けることもできました。瓦礫の撤去から土盛り、そして被災した町内の皆さんが再建していく様子など。

我が家では、長期の計画として被災した土地に自宅を再建することとしていましたが、土盛りをすすめても津波が来た場所に再建することに家族は抵抗があまりました。そこで考えたのが、トレーラーハウスを置いている畑に自宅を再建することでした。

そんな時期、丸谷さんと知り合い、町の再建、復興について様々な視点でのご意見など伺うことができました。

新しい街並み、景観について、大槌らしい復興とは何か。

丸谷さんのエコ・ハウス「そらどまの家」はここ大槌の風土・環境に適している素晴らしいデザイン・機能であることを理解しました。

何度も丸谷さんのお話を伺い、再建する自宅は「そらどまの家」と決め、設計に取り掛かっていただきました。

家のデザインも決まり、見積もりを取っていた段階で、家族が有責の交通事故を起こしてしまいました。

震災で全てを失い、そこから命がけで再建しようとした、まさにそんなタイミングでした。

有責事故ということで賠償責任も伴いました。

この事故の影響で自宅の再建計画は一時停止状態となり、約4年間も保留状態のまま過ぎてしまいました。

その間も丸谷さんは私たちに寄り添い、再建できる時期、タイミングを見ながら現在に至りましたが、いよいよそのタイミングが訪れ、今年、自宅の再建に向けて改めて動き出しました。

被災地では、思いがけないトラブルが発生します。

時間が経つにつれて土地の問題、資金の問題、そして生活環境の激変など、思い描く復興とはかけ離れた事態が次々に発生します。

計画はあくまで計画であります、自分が行動する道筋を描くことで、目標を

つくり、そこに近づこうと努力ができるようになります。

被災地で自宅を再建していくことは、通常の自宅の建設とはまったく別のことだと思います。

大槌の風土、環境は、海の町であることから夏は涼しく過ごせますが、冬は積雪こそ少ないが内陸山側から海に向かって吹き下ろす北西の冷たい風が吹き荒れます。

仮設住宅では、あくまでも応急であり湿気やカビの問題が多く発生しました。我が家のトレーラーハウスでも同様の問題が発生しています。これから再建する大槌の風土・環境にあった家のつくりは、これらの課題を克服したもので、そこに住む者にとって快適なものでなくてはなりません。

少子化、過疎、人口流出も見据え、高齢化社会にも適応し住む人にとって安全で快適であり、町を訪れる人には、大槌の特徴とも言えるような景観、風土に適した造りであることが、震災からの再建であり、また復興を達成するときではないかと思います。

被災した私たちが「そらどまの家」に住み、そこで新しい生活が始まり、音楽や郷土芸能などの文化が伝えられたとき、初めて復興したと言える日になるのではないかと思います。

私は「そらどまの家」が完成したとき、我が家の復興を宣言したいと思います。